

子どもの遊び

伊地知 美帆 稲益 有沙 四辻 杏香

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

現在の日本は戦前と比較して人々の生活は暮らし易く、経済的にも豊かとなっている。その背景として、住宅の構造の変化や環境の変化等が挙げられているが、一方、これらを要因として子ども達の遊びの環境が大きく変化したことも忘れてはならない事である。例えば、人々の暮らしをより充実させる為に野山は削られ空き地にはコンクリートが敷かれ、結果、子どもの遊びも外遊びから室内遊びへと変化していった。そして、これらの社会環境の変化はメディアの活用や漫画・ゲームの普及が進む等の新たな文化を生み出して、現在、日本のメディアや漫画は幼少期からお年寄りまで幅広い世代で楽しめる物へと発展すると共に、世界からも注目を浴びる程の人気を集めている。しかしながら、暮らしが豊かに便利になった反面、その環境の変化に対応できずに人々の暮らしや身体に影響が出る等の新たな問題が派生しており、少子化や核家族化等の多くの問題と合間って、将来を担う子ども達への影響が懸念されるようになってきている。そこで、本研究では子どもの遊びや環境の変化を取り上げ、それに伴う影響を詳しく考察していくことにする。

1 章 今と昔の遊び、その背景

現在ではひとり遊びが増え、更に室内遊びが増加してきている。では、昭和初期から現在までの代表的な遊びの変化、また遊びと共に変化している環境はどのように変化してきているのだろうか。そこで、この章では昔から現在まで伝承されている遊びをもとに子ども達の遊び方の変化や遊ぶ場所の変化を述べていく。

1.1 節 昔の遊び

昭和初期から終戦までの男の子の遊びの代表は軍国時代を反映した「戦争ごっこ」であると言われている。滅多に車が通らない道路や原っぱ等で子ども達は集団遊びに熱中していた。そして、そこには必ずガキ大将が存在していて、集団をまとめ、ルール違反のものには制裁を加え、弱い者をかばうという子どもの世界にたくましいリーダーとなっていた。「戦争ごっこ」以外には相撲や騎馬戦などの格闘技らしき遊びが主流であった。その一方で、女の子の遊びの代表は現在でもよく親しまれている「ままごと」や「人形遊び」であり、自分自身が母親になり空想と現実の間を行ったり来たりしていた。また、ままごと遊びの道具は家具や台所セット等から昭和30年以降にはテレビなどの電化製品が登場するようになる等、時代と共に変化していった。

上記で述べた遊びの中で、特に「ままごと」の起源は古く、終戦後に至るまでの間に様々な形で遊ばれてきたということが記録として残っている。例えば、古墳時代(3世紀~7世紀頃)の墳墓から一種のままごと道具として当時用いられたと推定されるろう石や鏡等の日用品、機織り具等が発掘されている。また、平安時代には雛遊びにままごと道具が存在していたことを「紫式部日記」等の古典に記されている。加えて、江戸時代には木・竹製のままごと道具、土焼きの茶碗、徳利類、真鍮・鍋製の餅網等が登場する等、この他、石、草、土等の自然玩具を用いる風景は古くからあり、それらは現在にも繋がっている。

「ままごと」が遊びとして定着したのは江戸時代であると言われている。その後、明治時代にはブリキ製の鍋や釜等をセットにしたものがつくられ、昭和時代にかけてアルミニウムやセルロ

イド製品が加わって種類が増えていった。また、第二次世界大戦後はプラスチック製品の登場によりままごと道具もキッチンセット等の新型が出現して、電池で本物そっくりに動く洗濯機やステンレス製の台所用品も出回るようになる等、「ままごと」は古くから絶えることなく受け継がれてきたのである。

1.2 節 現在の遊び

年代が進むにつれて、外で遊ぶ子どもの数は少なくなっていると言われている。その背景にはテレビゲームやパソコン、携帯電話等の普及がある。現代の男の子の遊びの代表はテレビゲーム・サッカー・野球・鬼ごっこ等であり、女の子の遊びの代表はテレビゲーム・鬼ごっこ・かくれんぼ等である。男女の間で一番人気のテレビゲームは、1983 年からファミリーコンピュータを初めとしゲームボーイ、スーパーファミコンなど形を変え普及し続けている。以上のように昔は外遊びが中心だったが、現在では室内遊びテレビゲームなど室内でされる遊びが増えている現状であるが、同時に、昭和からある鬼ごっこ等も伝承され現在でも引き継がれている。

1.3 節 遊びの環境の変化

昭和初期は、原っぱや路地裏、空き地等にはいつも子どもの遊ぶ姿が見られるのが当たり前であったが、1960 年代を境に子どもの遊び環境の質や量が大きく変化してきた。具体的には、遊びの「空間」が小さくなり、習い事の為に遊びの「時間」が少なくなり、地域での異年齢集団は学校での同年齢集団に変わり「仲間」が減る等である。また、かつて子どもの遊び場所となっていた道路や工事現場、自然、秘密基地などの空間は狭くて危険な場所となり、メディアの発展によって室内でも十分楽しめるだけのモノも多様化していった。その結果、子どもの遊びは量においては「空間」の減少、そして、質においては戸外の遊びより室内の遊びの総時間が圧倒的に増えるという変化を見せた。

都市部と農村部を見ていくと、遊びの環境が大きく変化している。例えば、都市部では豊かな自然空間が減少しているが、その分モノが溢れて人口も多くなっている。しかし、モノに頼り過ぎている生活の為に多くの子ども達で集まったとしても個人個人で遊べるようなゲームに熱中する傾向にある。それに比べ、農村部では人口の減少により近所に遊び仲間が少なくなっているが、自然環境には恵まれ、たとえ人口が少ないとしても一人でも自然と交わることによって様々なことが学べ、それが社会に出るときに大切なことになってくるだろう。

このように、遊びの環境は場所によってそれぞれ異なっているが、それに適応した子どもの遊びを考えることが必要なのである。

2 章 遊びによる子どもへの影響

昔は公園や道路で子どもが遊ぶ姿が多く見られたが、現在では室内遊びをする子どもが増えると同時に、子ども達に一人で遊ぶ習慣がついている。こうした状況の変化により、遊びが子どもに与える身体的・精神的な影響も大きく変化している。そこで、この章では社会的背景を下に、遊び・環境の変化がもたらした子どもへの影響について考えていく。

2.1 節 子どもにもたらす身体的影響

現在では、外遊びやスポーツ活動の時間が減少して室内でテレビゲームをする子が目立ちつつある。その為、近年では昭和 60 年頃から低下傾向にある子どもの身体的問題が重要視されている。文部科学省が実施している体力テストによると、30 年前と比較して 50 メートル走やボール投げ

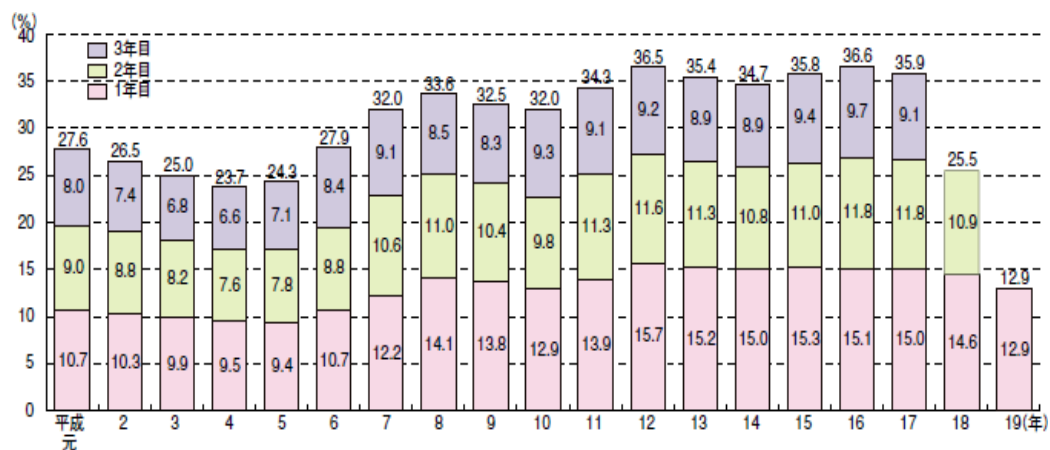
等の多数の項目で下まわっている状況になっている。これに伴い、最近の子どもの中には靴ひもを結べなかったり、スキップができなかったり等、自分の身体を操作する能力も失われつつある子が増えてきている。更に、体力が減少する事により生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下ももたらされているのである。

現在では免疫力の低下も懸念されており、その事により日本の子どもの43%がアレルギー性疾患にかかっている。アレルギー性疾患とは、アトピー性皮膚炎をはじめとして、気管支炎、花粉症、食物アレルギー等の事であり、アレルギー反応が起こる原因は人間の免疫機能が寄生虫や細菌、ウイルス等の微生物ではなくダニの死骸やスギの花粉等に反応している為である。これらの事が起こる原因として、運動不足や外遊びの低下等が指摘されている。加えて、昔から人間の体には体内に侵入してきた細菌や回虫に対応する免疫が存在しているが近年では抗菌グッズや消毒用アルコール等が普及する事により、回虫や細菌が駆除されたことも原因の1つとなっている。以上のように、清潔志向や運動不足が原因で肌への刺激の低下によって免疫力も低下してきた為、適度な運動を行い、そして、日光に当たることが大切なのである。また、アレルギー性疾患は子どもに多く見られるが、現在では日本人の3人に1人、約35.9%がアレルギー性疾患にかかっている。アレルギー性疾患はダニやカビが主な原因であり、気密性の高い住宅でダニやカビが発生しやすい為、都市部の方が農村部に比べ8.3%多くなっている。アレルギーを持っている子の親のアレルギーの有無を調べたところ、75%の親がアレルギーを持っている事が分かった。このことからアレルギーは同じ環境で生活する事による感染であり、アレルギーは子どもだけの疾患でないと考えられている。しかし、アレルギーは免疫の弱い子どもに多く発症しているが、年齢の経過と共に治癒するケースが多く、小学校入学前には70%が自然治癒しているのである。

2.2 節 精神的な影響

以前は公園や道路で遊んでいる子どもが多く見られていたが、最近は外で遊ぶ子ども達が少なくなっている。しかし、現代の子どもは学習塾やスポーツクラブ、稽古ごとで多くの時間を過ごしており、また、家庭用ゲーム機やパソコンの普及により室内での遊びが多くなり、子どもは一人で遊ぶことが習慣化したことにより仲間と遊ぶことができない子どもが増えている。昔は自分で遊びを考えて工夫していたが、今の子どもは大人の動きを真似したり、身近な素材を活用する工夫した遊びが少なくなっていることが現状である。そのことにより異年齢間の様々な人間関係を学ぶ機会を失い、人との関わりが希薄となり、コミュニケーション不足が指摘されている。その為、これらの問題は後に子どもの将来に大きく影響することが懸念されている。

第 1-2-9 図<3> 在職期間別離職率の推移(大学卒業者)



資料：厚生労働省「新規学校卒業就職者の就職離職状況調査」

上のグラフは新規学卒就職者の離職状況を示している。現在では若者の離職についての問題が増えており、1990年にバブル経済の崩壊とともに徐々に離職が増加している。離職の主な原因の一つとしては、景気低迷によって希望する職業に就職することが困難となったこと等が挙げられる。そして更に、労働条件が良い仕事も相対的に減少していることも要因となっている。その為、90年代以降にフリーター等の非正規雇用者が増え続け、正規雇用者一人当たりの仕事量は増加する結果となったのである。

非正規雇用の所得は相対的に低く、不安定である。しかしながら、正規雇用として働く場合には負担の大きい仕事を任せられ、長時間働くことになる。また、正規職員に対し高い労働力の質が求められる為、高学歴者には比較的求人があるが、学歴が低いほど求人がない状況である。更に、就職できたとしても人間関係がうまくいかずに辞める者も多く、これが若者をとりまく労働環境の現状となっている。

3 章 「遊び」に関わる様々な現状

子どもが身体的・精神的に成長して伸び伸びと遊ぶことができる為には、遊び方や遊びの環境を見直していくだけで果たして十分なのであろうか。すなわち、「子どもだけ遊び」をより良くしていく為には、親子の関係も重要なのである。そこで、この章では家庭における子どもとの関わり現状を明確にすると同時に、世界の子どもの遊び方とその環境について考察していくことにする。そして、最後に「子ども」という視点だけではなく、高齢者の遊びにも目を向け、遊びの現状やそれをとりまく環境について述べていくことにする。

3.1 節 家庭・地域社会の現状

現在と比較し昔の子ども達は道端で遊び秘密基地を作り、近所の世話好きなおばちゃんに声をかけられたりかみなり親父に怒られたりと地域の人達に育てられてきた。しかし今では学校と家庭のみの往復で地域との関わりは激減している。一方、現在では家庭における教育力が低下する傾向にあり、その理由として「過保護・甘やかせ過ぎな親の増加」や「しつけや教育に無関心な親の増加」が指摘されている。また、親が子どもと一緒に過ごす時間が諸外国に比べて特に父親が少なく、これは社会の流れと関連して仕事に追われるライフスタイルが子どもとの関わりを妨げていることが原因と考えられている。よって、今後男性が更に子育てや教育等に参加して家庭生活を充実して家庭と仕事の両立を図る為には、企業や仕事中心のライフスタイルを変えていく必要があり、そうすることによって親と子の関わりが増して、更に、絆も深まりより良い家庭生活に発展することが期待されている。

地域社会では都市化が進み、昔ながらの人々が互いに関わり合うコミュニティではなくなってきた。その為、少子化により地域が元来持っていた他者理解や協同の体験的学習機能が総合的に低下してきている。また、都市部や地方部に関係なく、郊外化の進展などに伴い、居住地域と職場・学校等が分離して、主に昼間における地域との関わりが少なくなっている現状となっている。従って、昔ながらの伝統的な遊びの伝承をしていく為にも、人材の宝庫である地域の活性化を進めていくことが今後の課題となっている。

3.2 節 世界の子ども

世界 25 カ国を対象とした調査において、世界の子ども達が好む遊びは、友達と遊ぶ事 (30%)、ゲームで遊ぶ事 (15%)、両親と遊ぶ事 (10%) となっており、上位 3 つで半分を占めている。現在、日本では一人遊びをする子どもが増えている現状であるが、世界的に見ると日本とスカン

ジナビア諸国の子ども達が友達と遊ぶ事を特に好んでいる。また、親が子どもと遊ぶ時間の世界的平均時間は週 14.3 時間であるが、日本では週 10.9 時間となっており、世界的に見ると日本では親子との関わりが少なく、伝承遊びの減少にも繋がっていることが懸念される状況である。更に、運動をする子どもの割合が豪州では 89%、ドイツでは 83%となっているのに対して、日本では 37%であり、「世界一動かない子どもがいる国」と言われていることも事実である。その背景として、日本では校庭や公園等、屋外の人工的場所が増え、遊び場所が変わってきている事が挙げられている。

これらの問題は先進国特有の問題であるが、その反面、世界には貧困を原因とする病気や飢えで 3 秒に一人、毎日 3 万人の子どもが亡くなっており、特に開発途上国では 7 人に一人の子どもが 5 歳の誕生日を迎えられないという現状なのである。また、18 歳未満の子どもが 30 万人戦場に駆り出され、更に 2 億 5000 万人の子どもが児童にも関わらず労働に加わっている等、世界には子ども兵士や児童労働の問題が存在していることを忘れてはならないのである。

3.3 節 第二の人生

高齢者の生きがいの重要な柱として「生涯学習」が挙げられ、その一環として高齢者の遊び、所謂「余暇活動」が注目されており、人生 50 年から 80 年社会の到来によって、近年、老後の余暇について考えられるようになってきた。更に、平均寿命が 80 年に延びた結果として、生涯時間の中に占める労働時間の割合は 1 割程に減少して、反対に余暇時間は 3 割にも達するようになっている。この余暇時間を現代の高齢者はどのように過ごしているのだろうか。

ある県では後期高齢者のライフスタイルについての調査を行ったところ、「現役時代の経験や知識・技能を生かした形」が全体の 25%を占め、続いて「ボランティア」・「町内会等の地域活動」がそれぞれ 6~7%という結果となった。その理由として最も多かったのは、「生きがい」・「新たな人間関係を構築」であり、全体の 6 割以上を占める結果となった。この結果から大部分の高齢者は健康である程度の時間的な余裕もあることから趣味や旅行等を中心とした自由な生活を送りたいと考えている一方、これまで培った豊富な知識・経験、高度な技能を有していることから、仕事や地域活動を通して更に社会との関わりを持ち続けたいと考えていると思われる。

現代では、戦後に比べて生活環境等の社会変化が目まぐるしく変化して、高齢者が一段と孤独感や不安感が募る時代となっている。しかし、その環境の中で 20~30 年も及ぶ長い老後生活を送っていくかねばならないことは動かしやうのない事実である。従って、高齢者の居場所や活躍の場の確保、また、高齢期の快適な暮らしの実現に向けた手立てを高齢者と地域社会が共に考えていく必要があるのではないだろうか。

まとめ

これまで述べてきたように、現在、日本の「子どもの遊び」は子ども達を取り巻く環境やコミュニケーションを図る手段によって変化している。具体的には、昭和初期では戸外遊びを通じて同年齢との関わりや異年齢との関わりを学び、同時に文化としての遊びも伝承されていた一方、現在では原っぱや空き地等は無くなり、こうした環境の変化に伴って「ゲーム」や「漫画」等の室内遊びが増えることで一人でも気軽に楽しめる遊びへと変わっている。このような背景には家庭や地域の問題として、核家族化や共働き、教育の仕方や地域社会との関わりが大きく変化したこと挙げられている。しかしながら、世界に視野を広げると食糧問題により貧困を原因とする病気や飢えで 3 秒に 1 人の子どもが亡くなっているという現状があり、日本だけで見ると深刻に見えるこれらの問題は実は豊かになり過ぎ便利さを求め続けた結果として派生していることを私達自信が受け止め、社会全体の問題として真剣に考えることが必要なのである。では、子どもの遊

び方について数々の問題が出ている中、私達は何をすべきなのであろうか。例えば、団塊世代を中心として現役時代の経験や知識・技能を生かした活動やボランティア・町内会等の地域活動を通して子ども達と関わる等、地域社会のコミュニティを広げることが問題解決の手立ての一つなのかもしれない。何れにせよ、答えを見つけることは難しいことであるが、確実に言えることは子どもからテレビゲームを取り上げること等は何の解決にはならないことを社会全体が認識することが重要なのではないだろうか。

おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において2008年から2011年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせ「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は2008年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡ししております。

この度、2018年8月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思いますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html>

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧くださいますようお願いいたします。

2018年8月8日
中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治